

春山さんのもっているエネルギーはすさまじい！！ものです

ビジネスのスタート(本人談)

私は成金の父に育てられ、二十二歳の時、父は見事に会社をつぶした。そのころ私は、ヨーロッパでアルバイトをしながら生計を立てる気ままな生活を送り、自分が何をしたいかわからない、自分探しの旅の最中だった。一年半を経過したころ、家業が倒産したので帰って来いと呼び戻され、気がつく父の借金を背負っていた。そこから私の社会人としての人生がスタートした。

借金の片付けをしながら、やっとひと息ついて不動産のおもしろさに目覚めてスタートした矢先、難病(進行性筋ジストロフィー)の宣告を受けた。二十六歳だった。

今振り返れば、私の人生はジェットコースターのようなものだ。医者が、診断を受けたばかりの、まだ歩いている私に向かって、続いて宣告した。「春山さん、間もなく車いすの生活になるでしょう」。あ然としている私に「その車いすもやがてこげなくなるでしょう。電動車いすになって、電動車いすも操作できなくなる。ひょっとすると寝返りもできなくなって、全ての機能を失うかもしれません」とハッキリ言った。

いま考えてみると、全くの名医(?)であり、私の近未来を見事に予言した。ただ私はその時に、「間もなく車いすの生活になるのなら、その前に、私の車いすを押してくれる社員を雇えばよいのだな。間もなく手が動かなくなるのなら、その前に、手の代わりにしてくれる会社というチームが作ればよいのだな。なくしたものを数えるな。体が動かなくとも、人としての尊厳は絶対失われない。首から上で銭は稼げる」と自分自身に言い聞かせた。

「三人四脚、四人五脚で失ったものを補ってもらいながら、残された機能を120%活性化すれば、お互いが補完し合って絶対に生き残れる。これで私の役割は果たせる」とこう決めた。

幸い(あえてこう表現したい)、家は没落商人。借金こそあれ、何もなかった。信用はない、実績もない二十六歳の若造で、そして難病というとんでもないおまけがついた。体の機能を失うのはいつかわからない。キザな表現をすると「運命と時間とのレース」。私は後を振り返らずに新しいスタートを切った。(春山さん)

人間は本来強いものなんです

「春山さんはなぜそんなに強いのか。なぜ瞬間的に運命を受け入れることができるのか」とよく聞かれる。いつも言うのは「私が強いわけではありません。泣いていたら終わっていたのです。

後ろを振りかえっていたら、それで終わっていたのです」と。自分の宿命のせいにして、なくしたものをばかりを数えていたら、私の人生はどうに終わっていたら。

日本人は戦後、夢にまでみた物質的な豊かさの飽和状態の中で、本来人間が持っている『生き抜く』という原始の力を失っているのではないかと私は思う。

友人の精神科のドクターも「春山さん、最近ストレスが多いと言うでしょ。あれは嘘です」と言う。ストレスが日本人、あるいは世界中に多いのではない。いま生きる文明社会の人類自体が、ストレスに大変弱くなってきているのではないか。<中略>日本はいま、豊かさと安全と、物の飽和状態の陰で、ストレスに弱い体質に変わってしまった。(春山さん)

SMAPの草薙さん

SMAPの草薙剛さんは二十九歳。さわやかな青年だった。まる一日密着して、私の会社や仕事ぶりを見学、取材。淡路島にも同行して、私が総合監修している「ニュー・アワジ・リタイアメント・ビレッジ」の現場も見た。私が難病でいろいろなものを失いながら、逆に新たに見つけてきた価値観、そこから生まれた商やビジネスを彼は体感した。テレビで紹介された世界で初めての「音声で動く自動寝返りベッド」は三洋電機と共同開発したものだ。私のように重度の障害を持ったものにとって、寝返りがどれほど大変なことか。返りができないからといって「寝たきり」を続けると、やがて床ずれをつくり命まで奪われる。もう一度自分の意志で動作できる自然な寝返りを取り戻したい。これは私だけの願いではなかった。妻も私を寝返りさせるために二時間ごとの断続的な睡眠しかとれない。自動寝返りベッドが誕生して、十一年ぶりにその労苦から解放された。介護する人をハッピーにしなければ日本はもたない。まさに私の商品開発における自信作。草薙さんは、実際にベッドに横になって体感し、その寝心地の良さに「すげー。だけど春山さん、これ、かっこいい」と連発した。

プロデューサーの話では、番組収録が終わって最終の飛行機で帰る時、私の話で持ちきりだったという。普通、彼らは収録が終わったら自分たちの世界にすぐ戻るのに、その日の草薙さんはいつまでも「春山さんってすごい」と言っていたらしい。(春山さん)

死にたいやつは死んでいけ。俺はこれから朝めしだ。

作家、吉行淳之介の父親、吉行エイスケの散文集に「死にたいやつは死んでいけ。俺はこれから朝めしだ」という一文がある。この言葉は私の胸を突き刺した。これは、死んでいく人間をあざけり笑っているのではない。中国の戦場で、友が次々と倒れていく。兵糧も尽きて、最後の力をふり絞って、それでもなんとか敵陣を突破しようとしている。

隣で銃弾にまみれた友が息を絶えようとしている。助けてやりたいが、自分にももう余力はない。友のために残り少ない力でも注いでやりたいが、それでは自らの命も支えることが出来ない。ギリギリの極限状態の中で、倒れていく友に向かって、涙をぼろぼろ流しながら、それでも生き抜くために、最後の握り飯をむさぼっている情景である。

(大阪日日新聞より 春山満さん)

ごあいさつ

紅葉の季節というより、もう落葉する樹木を目にする季節となりました。お元気でお過ごしですか？今回は春山さんの高齢者コミュニティーの紹介というよりも春山さんの生きる意気込みというか「強さ」をご紹介させていただきました。デリケートな話題に加え、私の表現が稚拙であることもあり、誤解を生みやすい一面があります。ひとりの春山ファンとして、またひとりの人間として春山さんの強さに学びたいと思います。春山さんがNHK教育テレビ「ゆうゆう」に出演した際(2002年)の録音をご希望の方にプレゼントします。全4回のうち後半の2回分(一時間分)を音楽CDにしてお送りします。「できることなら、もう一度女房をこの腕で抱きしめてやりたい」「息子と一度でいいからキャッチボールがしたい。」何度聞いても涙がでる家族愛と感動の生きざまとそして高齢者と死について語っています。恐縮ですがご希望は、ハガキなどの郵便、電子メールまたはファックスに限らせていただきます。ご住所・お名前・ご連絡先電話番号を明記の上、下記まで「春山さん」と書いてお申し込みください。春山さんの対談録(NHK教育TVでの音声)を無料にてお届けします。(秋葉でした)

発行者
秋葉 建設(株) 秋葉忠夫
289-2163八日市場市南神崎52-1
電話0479-72-0814FAX0479-72-0824
電子メール akibakk@rapid.ocn.ne.jp
URL http://www1.ocn.ne.jp/~akiba/